

博士学位論文の要約

論文題目：「わかりやすさ」を意識して書かれた文章の言語的特徴

—各種新聞記事の分析を中心とした考察—

氏名：羽山 慎亮

論文の要約：

本研究では、「わかりやすさ」が意識されつつ時代や想定する読者層がそれぞれ異なる新聞記事を主な対象とし、「わかりやすさ」が意識されたときの日本語文章はどのような特徴をもつか、という視点から考察を行なった。

第 1 部では、現代の各種新聞等を対象にして計量調査を行ない、「わかりやすさ」が意識して書かれた文章の特徴を考察した。

第 1 章では『毎日小学生新聞』のニュース記事、第 2 章では『毎日新聞』の「質問なるほドリ」欄の記事を語種比率・4 字以上の漢字列の割合・品詞比率・文の長さ・トークン比という 5 つの項目によって調査し、『毎日新聞』一面・総合面の記事と対照させた。その結果、『毎日小学生新聞』と「質問なるほドリ」欄では漢語を避け、和語を使用する傾向が確認できた。長い漢字列の割合も、ともに『毎日新聞』一面・総合面に比べて低いことが確認された。品詞構成については、名詞の割合が低く、「質問なるほドリ」欄ではさらに動詞の割合が高くなっていた。このことから、「質問なるほドリ」欄では一面・総合面よりも「動詞的構文」が多く、ウェブサイト上の Q&A 形式のやりとりにも近いことが確認された。一方、文の長さは数値のうえでは『毎日新聞』一面・総合面との差はみられなかった。トークン比については『毎日小学生新聞』は『毎日新聞』一面・総合面とほぼ同じであったが、「質問なるほドリ」欄は一面・総合面に比べて低くなっており、同じ語を繰り返し使って記述されている可能性が推測された。そして実際の記事文によって、その傾向を確認することができた。

第 3 章では政府刊行物の「わかりやすい版」8 冊の特徴について、「わかりやすい情報提供のガイドライン」に記されている項目のうちリーダビリティに関するものに焦点を当てて分析した。その結果、「名称等の表記は統一する」「漢字にはルビをふる」「漢字が 4 つ以上連なることばはさける」の 3 点が「ガイドライン」どおりの「わかりやすい版」

の特徴として認められ、一般向け版との対比が確認できた。また、「ガイドライン」に掲載されていない項目に関しては、「わかりやすい版」のほうが漢語および難解語を避ける傾向にあった。1 文の長さは冊子によってさまざまであり、わかりやすくするための要素としては優先度が低いものとみられていることが推測された。このことは第 1 章・第 2 章の結果とも共通するものであった。

第 4 章では『点字毎日』を取り上げ、「ないがい も一かい にゅーす」欄を対象に分析した。語の出現頻度について『毎日新聞』一面と比べたところ、語種別にみると和語では両紙の上位語に大きな差はないが、漢語と外来語では各紙面の内容を反映する語が上位を占めていた。一方、同音異義語の数を調査した結果、『点字毎日』にも『毎日新聞』と同程度に同音異義語が存在し、その中でも特に 2 字漢語が多くを占めていた。このことから、漢語あるいは同音異義語のある語を積極的に避けるということを行なわれていないことがわかった。

以上、第 1 部の調査・考察により、「わかりやすさ」が意識して書かれる場合には、特に「漢語」と「長い漢字列」を避けようとする傾向があることがわかった。意図的かどうかは別として、「漢語は難しい」「漢字が長く続いている表現は読みにくい」という考えが反映されているものとみられる。このことは、「わかりやすさ」をめざして書く場合には無意識的にも「漢語」や「長い漢字列」が避けられると言い換えることもできよう。ただし、「わかりやすさ」が意識されない場合には、たとえ漢字を使わない表記がなされても、漢語を積極的に回避することなく文章が書かれることが確認できた。一方で、「文が短いほうがわかりやすい」ということは先行研究によっても示唆されていたが、本研究の調査の限りでは必ずしも実践されているわけではなく、優先度は低くなっていることがわかった。

次に第 2 部では、日本の新聞文章を通時的に検証し、「わかりやすさ」への意識と関連づけながら記事文の特徴を考察した。

第 5 章では 1868 年に創刊された新聞を対象に、「大衆化」「わかりやすさ」という観点から考察を行なった。創刊号の序文やあとの調査からは、新聞の普及や、記事をわかりやすくすること、新聞による人々の啓蒙がうたわれていたことが確認できた。振りがなの調査からは、総振りがなに近いほど多用したり、両振りがなを用いたりした記事もみられた。人々の啓蒙や事業としての成功を達成するために記事をわかりやすくする手段の

一つとして振りがなが利用されたものと考えられる。これらのことから、1868 年は「新聞大衆化の萌芽」の時期とみることは可能ではないかという結論を出した。

第 6 章では、ひらがなのみで書かれた『まいにちひらがなしんぶんし』と、漢字を使いながらも総振りがなを採用した『読売新聞』を対象に、語彙など表記以外の面での両紙の異同を検証した。『まいにちひらがなしんぶんし』の語種比率を調査した結果、和語が 80%弱を占めており、『読売新聞』よりも和語が多かった。また、品詞比率は両紙で類似していた。一方、「話しことば性」という考え方をもとにいくつかの項目を立てて調査したところ、『まいにちひらがなしんぶんし』には話しことば性がほぼ認められなかったのに対し、『読売新聞』にはある程度の話しことば性が確認された。その結果として「俗談平話」と称される『読売新聞』の文体イメージが形成されたと考えられ、読者の獲得に成功した一因となったことを示した。

第 7 章では 1922 年の『東京日日新聞』と 1946 年の『読売報知』の 2 紙における漢字制限前後の記事を計量的に分析した。両紙ともに漢字制限実施後は漢字の量が減っており、表記面以外でも、実施前に比べて漢語と名詞の割合が低く、1 文が短いという変化がみられた。両紙の漢字制限は単に記事の表記の問題のみでなく、「わかりやすさ」が意識されることで語彙などの面にも影響を与えたことが確認できた。

以上、第 2 部では「わかりやすさ」を軸とした上で各時代の新聞記事の文章について実証的に分析したことにより、各新聞に対するこれまで評価とは異なる面も見出すことができたと考える。

最後に第 3 部では、日本語非母語話者向けに書かれた新聞および韓国で発行された韓国語の新聞等を対象に、第 1 部での日本の新聞についての考察と対照させた。

第 8 章では日本語非母語話者向けに書かれた新聞自体がほとんど存在しないことを述べた上で、イベント情報や季節の話題を掲載している『ひらがなネットしんぶん』の「きせつのおはなし」欄を調査した。その結果、語種比率では和語が 70%弱を占めており、和語主体の文章であることが示された。また、4 字以上の漢字列の割合と文の長さは、非常に低い値であった。一方、品詞比率の調査からは、「きせつのおはなし」欄は動詞的構文で書かれる傾向が強いことが推測された。

第 9 章では韓国の子ども向け新聞『オリニ東亜』「ヌンノピ社説」欄と一般紙『東亜日報』「社説」欄を対象に、語種比率・品詞比率・文の長さ・トークン比の調査を行なった。その結果、「ヌンノピ社説」欄では漢字語を避け、固有語を優先する傾向にあること

がわかった。また、品詞比率については、数値としては名詞の割合が低く、動詞の割合が高かった。実際の記事文を確認したところ、『東亜日報』「社説」では名詞的構文となっている表現が、「ヌンノピ社説」では動詞的構文になっているものが見受けられた。一方、文の長さトークン比については「ヌンノピ社説」欄と「社説」欄でめだった相違はなかった。これら 4 つの調査項目すべてにおいて、第 1 章で示した『毎日小学生新聞』の特徴と共通していることが明らかとなった。

第 10 章では韓国の知的障害者向け「わかりやすい版」である『発達障害者法をやさしく知らせてくれる本 うれしい、発達障害者法』を対象とした。その中で法律の背景や概要を説明した部分と法律の条文をわかりやすくした部分を調査したところ、元の条文に比べて情報量は減っているが、固有語の割合は 30 ポイント近く高かった。また、名詞の割合は低く、動詞の割合は高くなっており、元の条文とはそれぞれ 10 ポイント近くの差があった。さらに、1 文の長さは 2 分の 1 以下で、「わかりやすい版」と元の条文の間には大きな差がみられた。一方、トークン比については元の条文のほうが低い、つまり同じ語を繰り返し使用する傾向がみられた。これについては、元の条文では条文として正確な情報を盛り込まなければならず、逐一主語を明示するといったことがなされるためであることが確認された。

以上の第 3 部における考察から、日本語非母語話者向けの文章、あるいは韓国語の文章においても「わかりやすさ」が意識されたときには共通する特徴を持つことが多く、その中でも特に語種構成や品詞構成に特徴が表われることが明らかとなった。